

安田 裕子（立命館大学総合心理学部准教授）

改めましてよろしくお願いたします。総合心理学部の安田と申します。私の方からはこのように「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」と大きなタイトルがついていますが、プロジェクトで行っている研究についてご紹介をさせていただきます。

私自身は質的研究をやってまいりましたが、このプロジェクト紹介は、量的研究を前面に出しながら、質と量でアプローチしていますというところでご報告いたします。その意味では若林先生がおっしゃった最後の、プロジェクトで学融的な研究を行うことによって、質と量をミックスする研究ができるのかという、そういったところを引き受けたご報告になるかなと思います。スライドが若干多めですが、視覚的に理解いただければと思っています。

学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成

このプロジェクトは5つのグループによって成り立っておりまして、今日もプロジェクトリーダーの矢藤先生をはじめ、プロジェクトをがっしり下支えしてくれている研究員の皆さんが来てくださっています。

1つ目のグループは乳幼児期で母子関係、2つ目は児童期で学習がテーマです。3つ目は青年期・壮年期でキャリア発達を、4つ目は壮年期・中年期で、健康増進を扱っています。そして5つ目のグループは老年期とグローバル化下敷きにしたダイバーシティを扱う研究を行っています。こうしたグループ構成です。図にしてお示ししていますが、これはすなわち生涯発達を構成する内容になっているわけです。赤ちゃんからお年寄りまで、そして現在のグローバル化社会を踏まえた研究プロジェクトです。もちろん各論的にいろんな重要な研究はなされていますが、私たちのプロジェクトの大事なポイントの1つは各時期をシームレスにつなぐということです。

例えば、発達障害と診断された子どもの情報が、小学校、中学校と適切に引き継がれていくことを含め、地域社会の中で支援がつながっていくことがリア

ルに続く子どもの人生にとっては重要でしょう。そうしたシームレスな支援が地域社会のなかでなされることが大切であると考えています。また、グループ1の乳児期については行動科学、グループ2の児童期は神経心理学、グループ3の青年期・壮年期は質的アプローチで、グループ4の壮年期・中年期はコミュニティ社会学的な観点から探究するというように、各時期で捉えるべきことに特化した方法論を設定しています。こうした方法論についても、おいおい、グループを越えてつないでいきたいという展望をもってプロジェクトを推進しています。

研究の背景

こういったプロジェクトを立ち上げた背景は2つございます。まずひとつは、お伝えした通り、乳児期から老年期まで各時期に特化したいろんな課題があり、それをとりわけシームレスにつなぐ、ということがあげられます。

もうひとつは、各時期だけを見ることなくシームレスにとらえることで、人の生に対して、実践面と理論面を統合してシームレスな支援を構築していきたい、ということがあげられます。人生を分断せずに全時期を視野に入れて全体としてとらえることをプロジェクトの根幹としております。

さきほどご提示いただいた本日のお題としましては、私からはプロジェクトの報告を中心に、とりわけ哲学的視座については議論のなかで考えていければと思っています。

具体的な研究の取り組み

各グループで問題を焦点化して行っている研究はもちろんありますが、プロジェクト全体としましては、「いばらきコホート研究」を行っています。コホート研究というのはある特定の人を対象に2回以上にわたり調査を行う縦断的な研究です。人の生を追いながら、あるポイントポイントでデータを収集し分析をして、支援に活かすことを目指して実施しています。矢藤優子プロジェクト代表のグループ1を中心にやってきているもので、研究員もグループ間でつながり厚い協力体制を築きながら取り組んでいます。

「いばらきコホート」を推進するうえで、最初は某総合病院と協力体制を築

きましたが、その後、諸経緯があり、現在は茨木市の子ども健康センターとの連携で実施しています。母子手帳を取りにこられた妊婦さんに研究協力のビラを配っていただき、それをみて研究協力の申し出をしてくださった妊婦さんを対象に研究を進めているところです。

研究の主軸は質問紙調査です。出生前から実施しています。また出生後には、子どもと親子の関係性を行動観察でとらえることもしています。これらは数量的なアプローチです。

もうひとつ数的な指標として生理指標があります。生理指標では、意識などのコントロールのおよばないまさに生理的な量が捉えられます。この3つが量的な指標となります。

他方、質的なアプローチとしてインタビューを行っております。私の担当するグループ3で研究員の方が中心になって頑張ってくれています。テーマは、妊娠期女性のキャリア発達・キャリア形成です。仕事に関することを含め、子どもを産む・育てるという人生設計や家族形成に関するお話をうかがうインタビュー調査を行っています。

いばらきコホート調査（一部）

字が小さいのですけれども、子どもと母親と母子というふうに分かれていますね。母子のところは行動観察です。子ども、母親のところはお母さんに調査に回答いただきます。上から見てみますと、子どもの「気質」や子どもの「適応性」についてお母さんに答えていただくようになっています。それから、お母さんの項目はお母さん自身のことについてです。最初は「リクルート時情報」で、デモグラフィックな情報、つまり性別、年齢、所得などの人口統計学的属性についてです。あと「基本情報」は、母子手帳から必要と思われる項目を抜き出して構成しています。その後に質問紙調査になっておりまして、「気質」ですとか「うつ」のありよう、そして「育児環境」はたとえばお散歩に連れて行きますか、といった項目です。「被養育方式」というのは、お母さん自身が育ってきた環境に関する質問内容です。そして「養育態度」は、子どもに対して温かく言葉かけや問いかけができるか、お話しができるか、というような項目です。あとは「生活の質」です。

こういった質問紙を各時期で回答していただいています。上のほうに小さく
て申し訳ありません、「10w」と書いているのは10週のことです。妊娠週数
10週、14週、25週、32週、そして1カ月。そして、3カ月、6カ月、1年、2
年、3年、4年、5年、6年までで、各ポイントに必要なデータを収集するとい
う調査になっています。

1月の時点で研究に協力くださっている登録者は105名です。もっとも、コ
ホート研究では普通にあることなのですけれども脱落があります。脱落につい
ては、いかにして防ぐかという工夫も大事なのですが、一方で、そこから分析
したり考えうることもあります。なお、だいたい子どもが生まれて1カ月ぐら
いのときに、脱落者が多いと聞いています。

質問紙調査

質問紙調査についてご説明します。ご存知の方もいらっしゃるかと思います
が、認識ですとか意識ですとか行動などに関して、質問紙項目を作成して標準
化を行った調査を用いて、データを収集します、いろいろなデータの収集の仕方
がありますけれども、このコホート研究では、自記式によるウェブ調査を行っ
ています。

Web 調査内容

改めましてピックアップしますと、このような項目をお尋ねしています。基
本情報としては、家族構成ですとかSES (Social Economic Status) です。
SESとは、社会経済的な状況のことです。他には、夫との家事分担があります。
それから先ほどお伝えしましたような質問紙調査は、時期によってわけて
回答いただいています。Webでデータを収集しています。

抑うつ・うつ傾向の項目は、「ものごとに対してほとんど興味が無い」「楽し
めない」などがあります。このように、合計9項目で多くはなく、答えやすい
ものをお願いしています。また、生活満足度については21項目で、「生活は楽
しいですか」ですとか「満足していますか」といったことを、時期によってお
答えいただいています。いま継続中ですので、途中の報告に過ぎないのです
が、今お見せできるデータをお示しします。

産前 14w と 25w の 2 時点比較、QOL と PHQ の関連

これは 14 週と 25 週を比較したデータです。QOL というのは生活の質です。もうひとつの PHQ というのはうつ傾向です。統計的な分析にかけていまして、注目していただきたいのは下の「QOL と PHQ における比較」の表です。*は有意な差を示すのですが、14 週と 25 週を比較しますと、25 週のほうが生活満足度が高く、下の PHQ はうつ傾向ですが、14 週のほうがうつ傾向が高くなっています。これは、妊婦さんにとって生活満足度があとの週数のほうが高いことを示すものですが、つわりがあつてうつ傾向が早期に生じることが影響していると考えられ、そうしたことが数値で明らかになっております。

分析の観点はさまざまにあります、たとえばこうしたことがいえます。

観察法

次は観察法についてです。観察は「目を凝らし」「耳をそばだて」とありますように、ある状況を体系的に整理・分析する方法です。行動をとらえるのですが、行動のみならずその背景にある内面に迫りとらえられた現象に潜む規則性や法則性を発見しようとするのが観察法の特長です。言葉を話さず、むしろ行動にそのリアルなありようがとらえられる赤ちゃんや、親子の触れ合いの様子や関係性の形成といったことを把握するのに適した研究方法です。質的にも量的にもアプローチできますが、本コホート研究では量的なアプローチで分析を行っています。

1 カ月の行動観察はご自宅にうかがって実施し、3 カ月目には OIC に来ていただいて、大学内の実験室で行動観察を行います。こうして収集した観察データから親子の関わりについて分析・検討します。

産後親子のかかわりについて

左から、「主体性」「応答性」「共感性」「運動制御」「感情抑制」までが子どものありようをとらえる項目です。それ以降の「主体性発達への配慮」からはお母さんの子どもへの配慮のありようについてとらえる項目になっています。各項目について質問項目がありまして、例えば「応答性」をとらえるに際し、

例えば「話の最中に明らかな反応を示す」という項目に対して、「0」か「1」か、すなわち「ある」「なし」で測定します。このように各項目をチェックして全体的な評価を行うというかたちで、行動観察を行っています。「0」「1」で測定する点において、量的なアプローチになります。

産後1Mと3M時点、親子のかかわりにおける変化

産後1ヶ月の、子どもと母親のかかわり指標得点の相関を示している表です。やはり*が付いている数値が相関が高いこととなります。いくつか*が付いていますね。たとえば、濃いオレンジでマークしている.821という数値に着目していただくと、お母さんの「主体性発達への配慮」と子どもの「主体性」とに相関があることが、数量的に明らかになっていることがわかります。分かりやすい結果ですね。翻って、子どもの主体性がなかなか育たないということを考えるうえで、その理由を子どもの気質に還元することなく親子関係をとらえる視点を提供してくれるという点で、示唆的な結果に思います。

産後1Mと3M時点、親子のかかわりにおける変化

これら4つのグラフは、研究協力者の個別の情報です。産後1ヶ月と3ヶ月の時点の親子のかかわりの変化です。棒グラフは、青が1ヶ月を、赤が3ヶ月を表しています。それぞれ、さきほどお伝えしたように順に「主体性」「応答性」といった項目について変化が示されていますが、注目しているのは3つ目の「共感性」です。個人間で結構ばらつきが大きくて、かつあまり育っていないことが見てとれますが、共感性は脳の発達との関連もありますから、生後1ヶ月や3ヶ月では低くて当然ともいえます。また、そうした脳の発達と関連があるため、データ数を増やしていくと、平均値が見えてくることが期待されもします。

質問紙調査＋行動観察

こうした行動観察のデータを、今後は質問紙調査のデータと組み合わせて分析することになります。試みにすこし相関をだしてみました。最初のほうにお話しした質問紙に「うつ」や「生活の質」をとらえるものがありました。それ

らのデータと行動観察のデータの相関がどのようにとらえられるかということで、いま行動観察のデータが10程度ですので、 $n = 10$ で分析してみました。

やはり*が付いている数値についてみてみましょう。負の相関があることがとらえられますが、どういうことを示しているかといいますと、お母さんのうつ傾向が低ければ子どもの主体性や共感性が高いということがわかります。

質問紙調査＋行動観察 総合的分析へ

今後データ収集を継続していきますが、いろんな質問紙調査がありますから、さまざまに組み合わせて分析したときに見えてくるものがたくさんあるのではないかと考えています。このスライドは総合的分析によりどういうことがとらえられるかを展望した全体図です。デモグラフィックデータ、他の気質や既往歴など個人のデータ、夫婦での家事分担や相談者に関することなどの社会的なデータを質問紙調査で収集し、他方で、親子の関わりを行動観察でとらえ、こういったデータを統合して分析していくことでいろんなことが見えてくるのではないかと、考えています。

生理指標を用いた研究

次に生理指標です。先ほどお伝えしたように、言語化が難しい、たとえばストレスなどを生理的な指標でとらえます。実際には唾液を提供いただきます。コルチゾールとオキシトシンを指標としていまして、コルチゾールはストレスと、そしてオキシトシンは幸せホルモンといわれていてスキンシップや信頼や愛情のありようと、深い関連があるとされています。このようなキットを用いています。

調査方法

研究協力者の方にキットをお渡しして、ご自身で唾液を採取していただきます。週数と時間が決まっています、研究協力者の方に、都合のよい日に採っていただきます。1日4回、起きた直後、起きた30分後、寝る1～2時間前、寝る直前に採取して冷蔵庫に保存していただきます。採る前にご飯を食べてはいけないですとか乳製品を食べてはいけないですとか、そうした決まりがいくつ

かあり、それでもご協力いただいていますのでありがたいことです。この生理指標の分析を少しお見せします。

コルチゾール ストレスとの関わり

これはコルチゾールでして、ストレスとの関連がとらえられます。左側の表はある研究から抜き出した一般的な日内変動です。そして右側の表が研究協力いただいている方々のものですが、両者のあいだでは、形状はほぼ変わりません。もっとも、日内変動がかなり大きいことが示されたと思っています。

オキシトシン 親子の愛着形成や育児行動との関わり

もうひとつはオキシトシンです。オキシトシンは養育行動ですとか愛着形成との関連がとらえられるものです。こちらについてはかかわる先行研究がなくて比較はできませんが、本研究のデータからこんなふうに変動がまとめられました。

こちらは日内変動があまりなくて、個人の4回の平均をプロットしました。個人によってかなり違うということが示されているかと思うわけですが、こういったことは、お母さんのうつ病のありようなどとの関連をとらえれば、何か見が出るのではないかと期待しています。

生理指標が明らかにしてくれることもたくさんあるのですけれども、他方で、生理指標は他の要因の影響を簡単に受けます。例えば、何か別のことで気持ちがいらいらするとコルチゾールの数値が上がることがありますし、また、ペットを撫でているとオキシトシンの数値が上がることがあります。一時的な変動がのぞき切れないということがあります。ですので、やはり、生理指標と質問紙調査とを組み合わせるといったことが非常に重要でしょうし、先ほどお示したような総合的な分析プランが重要になってきます。

妊娠期女性へのインタビュー調査

最後に、インタビュー調査についてです。インタビュー調査は質的なアプローチです。こちらも現在進行形です。このデータは16名分になります。年齢ひとつとりあげても、例えば高齢の方もいらっしゃいますし、いろんな状

況で出産を迎えられます。新しいのちを産むということも、人を育てるということも、素晴らしい営みです。また一方で、自分の人生も夫との関係も、家族としての人生もあります。そういった女性たちの広義のキャリア形成・展望というものを、インタビューでとらえるということを行っています。

哲学的な視座としましては、ナラティブ・アプローチをベースにしています。語りにとらえられる主観的な意味づけを大切に、探究しています。

着眼その①：妊娠と就労継続

分析の視点はいまのところ2つです。ひとつはお母さん自身の就労を含めたキャリア形成・展望です。子どもを持つ予定のある女性について、雇用の形態はいろいろですが、77.7パーセントの方の就労希望がデータとして明らかになっています。このことは、女性の社会進出が許容されている現実を明らかにしていますが、他方で、女性は仕事と家事、子どもが生まれれば育児が加わるというように、負担が増えていく現実があります。

こうしたなかで、家事と仕事のみならず育児も含めた両立ですとか、そこに関わる夫のサポートですとか、そういった観点での研究が多くなされていますが、本調査で見えてきたこととしましては、権利や希望というよりもむしろ、働くことのある種の必然、です。具体的には、経済的な面、子どもの将来を見据えてというようなこと、女性自身の就労の継続性、といったことです。現在、さらなる分析を進めているところです。

着眼その②：妻の語りから見る夫の家事・育児

次に2つ目の分析の視点、妻の語りから見る夫の家事・育児状況についてです。家事や育児のサポートをする夫が多くなっていますが、もう少し深く入り込んで見ていくと、実のところ、妻の配慮によりお膳立てされて夫がサポートさせてもらっているというような、そんな現実が見えてきたということがあるのでないか、ということです。

こういったことは別に妻の妊娠期に限らないのですが、妊娠期は、これから家族を形成していく時期であり、また結婚後それほど時間が経っていないという過渡期・分岐点でもあり、また、その後子どもを育てる、場合によっては複

数の子どもを育てている大変な状況でもあるという点において、妊娠期に注目するのはすごく面白いことではないかなと思っています。

妻がうながして達成される夫の家事・育児参加？

どんなふうに家庭内の労働が分担されているかを分析しますと、妻が、たとえば、夫の家事の好みなどを考えたり、夫と子どもとの関係をより良いものにしていけるように配慮したりして、夫の家事・育児参加を促すように一生懸命環境設定しているといいたいでしょうか。そうしたなかで、不満ですら抑え込んでいる面が見えてきたりもします。

もっとも、夫のサポートを勧めるだけではなく、妻のマネジメントで夫が家事・育児に参加する現実があり、結果として夫の実質的な家事・育児行動が増えているということが現実的にありますので、そのダイナミズムを見ていきたいというのが、2つ目の視点になります。

あともうひとつ、これは展望ですが、最初のほうに稲葉先生が紹介をしてくださったプロセスをとらえる質的研究法 TEM (Trajectory Equifinality Modeling) を用いて、例えば、夫が変わる転換点がどのように生じたのか、その過程と発生の様相を分析したいとも思っています。

以上が私からのプロジェクト報告です。プロジェクトの哲学的な視座については述べることができていませんが、あとのディスカッションのところで一緒に考えていければと思っています。

最後のスライドかと思います。シームレスというキーワードを最初にお伝えしましたけれども、各時期のみならず方法論的にも融合させて、複雑な人の生に接近していくということ。そこに、混合研究法が役立つ可能性がおおいに秘められているように思っています。以上です。長くなりましてすみません、ありがとうございました。

稲葉 ありがとうございました。私は安田先生のこれまでの発表をいろいろなところで何度も拝聴しましたけれども、TEMのお話しか聞いたことがなかったので、質的研究をやっておられる方だと思っておりました。しかし今日のお話では、量的なデータ分析もされておられることを初めてお伺いして、あそこ

ういうこともやっておられるのだということをご共有させていただいた。そういう意味ではいい機会だったと思います。

議論はまたあとでさせていただきたいと思いますが、安田先生の研究を拝聴して、あとで時間があれば抱井先生や八田先生にコメントをいただきたいと思った点があります。安田先生のお話の中で、量と量を統合して分析しようとしているという話題があったと思います。パーソナルとソーシャルそれぞれについて、いろいろな指標でデータを採って、それを統合するといった図を提示されておられました。そのような量と量の統合に関わる研究の動向について、あとでコメントいただければと思います。量と量のミックスなのか、量と量のマルチメソッドなのかという辺りについて、最後にコメントをいただければと思います。

それでは3番目の話題提供者ということで、先ほどもご紹介させていただいたので再びお名前だけで、春日彩花先生に話題提供をお願いいたします。

2019年度立命館大学人間科学部研究発表大会
人間科学と最先端研究法の未来
14時15分～14時45分

**第3部 パネルディスカッション
人間科学と混合研究法の未来**

学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成

立命館大学総合心理学部
安田裕子

学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成

プロジェクトリーダー：総合心理学部・教授 矢藤優子

第1G：乳幼児の社会性の研究 総合心理学部・教授・矢藤優子
第2G：神経科学・生理学手法による「教授－学習」研究 産業社会学部・准教授・岡本由子
第3G：青年期のキャリア発達とその支援 総合心理学部・准教授・安田裕子
第4G：地域における科学的根拠に基づく社Ⓐ・老年期の健康づくり 総合心理学部・教授・チチウツクヤ
第5G：シニアライブ支援、コミュニティダイバシィティ促進に関するエビデンスの創出 総合心理学部・准教授・鈴木幸子

学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成

プロジェクトリーダー：総合心理学部教授 矢藤優子

グループ1 研究の根拠に基づく子育て支援

グループ2 発達科学・生理学手法による「教授－学習」研究

グループ3 ライフに際する個別情報に基づくキャリア発達

グループ4 地域連携の課題 暮らしと社会 価値観の国際比較研究

グループ5 シニアライブ支援とコミュニティダイバシィティ促進に関するエビデンス創出

学内女性教員
10名以上の専業
学業と育児による
社会貢献

複数の手法を用いたシームレスな支援へ

研究の背景

社会的な課題
・少子高齢化時代における課題の山積
例：コミュニケーション(言語)学習・キャリア選択・健康維持など

研究上の課題
⇒解決する科学的根拠の欠如
・障害・顕き発見研究と実践(支援)の不統合
・研究対象とする時期だけを見るタコ壱化傾向

⇒社会問題に返すためには
分断せず人生の全時期を視野に入れる必要性

**本日のパネルディスカッションで
いただいたお題**

話題①：現在取り組んでいるプロジェクトの概要

話題②：どのような(複雑な)問題の理解や解決に取り組んでいるのか それをどのような学術的視点(社会構成主義、ポスト実証主義、解釈主義など)から探求しているか

話題③：量的データや質的データを扱っているか(あるいは今後扱いたいそうか)。またそれらのデータや分析結果を「統合」することで、どのような新しい知見が得られそうか

具体的な研究の取り組み

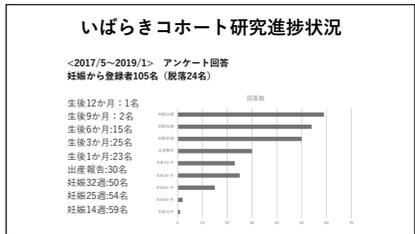
乳幼児の社会性の研究「いばらきコホート」調査
—科学的根拠に基づく子育て支援のための学際的研究—

- ・グループ1を中心に
- ・各グループの専門研究員・研究員たちによる厚い協働体制
- ・家木市内某総合病院-家木市子ども健康センターとの連携

出生前からの子育て・子育てに関する質問紙調査
行動観察による親子の社会的関係性評価
生理指標(唾液中の cortisol、オキシトシン)を用いた調査
妊娠期女性のキャリア(職)満足に関するインタビュー調査

いばらきコホート調査 (一部)

項目	調査項目	調査時期	2016	2017	2018	2019	2020
乳児	出生	2016.10~2017.03	○	○	○	○	○
	育児	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	発達検査	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	行動観察	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	生理指標	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	キャリア	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	育児支援	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	育児支援	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	育児支援	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
	育児支援	2016.11~2017.03	○	○	○	○	○
合計							



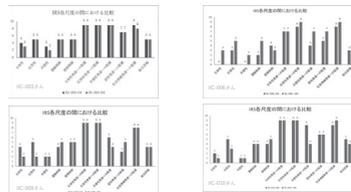
産後1ヶ月：子どもと母親のかかわり指標得点の相関

産後1ヶ月：子どもと母親のかかわり指標得点の相関($n=10$)

	子ども		母親						
	言語性	身体性	言語的関与	身体的関与	認知的関与	情緒的関与			
言語性	7.47*	.521*	.457	.532	.527*	.587	.652*	.250	.480
身体性		7.62*	.438	-.032	.543	.389	.757*	.503	.218
言語的関与			.609	.335	.575*	.583	.833	.553	.567*
身体的関与				.496	.384	.742*	.242	.191	.318
認知的関与					-.120	.100	-.170	-.141	.232

* $p < .05$, ** $p < .01$

産後1Mと3M時点、親子のかかわりにおける変化



質問紙調査+行動観察

項目	測定方法	母親				子ども														
		言語性	身体性	認知的関与	情緒的関与	言語性	身体性	認知的関与	情緒的関与											
産前	質問紙調査																			
産後1ヶ月	質問紙調査																			
産後3ヶ月	行動観察																			
産後6ヶ月	行動観察																			
産後12ヶ月	行動観察																			
産後24ヶ月	行動観察																			
産後36ヶ月	行動観察																			

質問紙調査+行動観察

質問紙調査結果と行動観察結果を合わせて見た、母親の心身健康と親子のかかわりとの関連

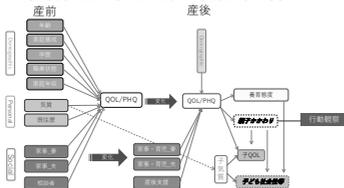
産後12M時点：母親の生理指標、うつ傾向と親子かわりとの関連

項目	子ども								
	言語性	身体性	認知的関与	情緒的関与	身体的関与	認知的関与	情緒的関与	情緒的関与	
うつ傾向	-.144	-.142	-.190	-.179	.000	.148	-.148	-.179	.000
生理指標	-.050	-.014	-.050	-.068	.018	-.014	-.014	-.071	-.122

* $p < .05$, ** $p < .01$

母親のうつ傾向が子どもの発達に影響を及ぼす傾向が示唆されている。

質問紙調査+行動観察 総合的分析へ



生理指標を用いた研究

- 研究に生理指標を用いることの意義
 - 言語化が難しい情報を知る手がかりとなる
- 本調査においては主に唾液中のコルチゾール、オキシトシンを指標としている

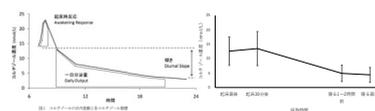


調査方法

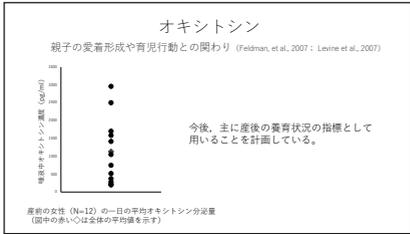
- 唾液指標の採取を調査協力者本人に行ってもらう
 - 採取キットをお渡しし、都合の良い日に採取してもらう。採取後は家庭の冷蔵庫で保管、後日回収する
- 妊娠25週～32週の間、産後1ヶ月、産後6ヶ月、産後12ヶ月、産後24ヶ月、産後36ヶ月の調査を予定している
- 1日4回(起床直後、起床30分後、寝る1-2時間前、寝る直前)
 - 「採取1時間以内は食事をしてはいけない」「乳製品を摂取してはいけない」等、多くの制約がある
- 現時点では主に産前(妊娠25週～32週)の調査協力者の唾液検体の分析を行っている

コルチゾール

ストレスとの関わり(井澤ら, 2010)

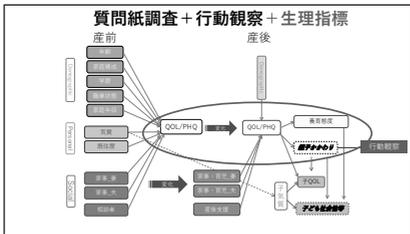


一般的なコルチゾールの日内分泌量変化(左)と本調査により得られた妊娠25週～32週の女性(N=12)の日内分泌量変化(右)は井澤ら(2010)より



唾液指標による調査-可能性と留意

- 唾液中の cortisol ゾールやオキシトシン濃度を指標とした調査
 - cortisol ゾールはストレスとの関わり(井澤ら, 2010)が、オキシトシンは親子の愛着形成や育児行動との関わり (Feldman, et al., 2007 ; Levine et al., 2007) が知られており、それぞれの指標として用いられる
 - 言語化が難しい情報を知る手がかりとなる
- 注意点
 - 個人差が大きい
 - 測定した際の状況などによる個人内での誤差も大きい
 - 質問紙などと併せて用いることで真価を発揮する



妊娠期女性へのインタビュー調査

- 16名を対象に
- 年齢、職業 (正規雇用/非正規雇用/その他)、家族形態 (第1子/第2子/第3子)、不妊治療
- それぞれに異なる状況下で「出産」という大きなライフイベントを控えている妊娠期の女性たちの、(職業) キャリア展望をとらえる。
- 語り (ナラティブ) へのアプローチ。そこにとらえられる、職業キャリア展望と母親役割に関する主観的な意味づけ。

着眼その①：妊娠と就労継続

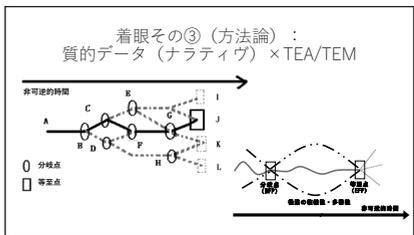
- 今後子どもをもつ予定のある妻においても、40.5%の妻が正規の職業として、34.2%がパート・派遣として働いており、自営業等を含め 77.7%が就業 (国立人口問題研究所, 2015)
- 「男性は仕事、女性は仕事と家事・育児」?
- 子どもをもって働くために必要な支援を考える基礎的研究
 - 契約と家事のみならず、育児との両立に関する希望
 - とともに働き、ともに家事・育児を担う夫のサポート
 - 「夫は仕事、妻は家事・育児」に限定されない多様なあり方
- 本インタビュー調査における分析からは「就労継続の必然性」

着眼その②：妻の語りからみる夫の家事・育児

- 夫の家事・育児参加の背景に、妻の感覚的な活動があるのではないが
- 妊娠期への焦点化：若年 (家族としての発達可能性)
 - 結婚後それほど時間がたっていない過渡期
 - 産後に備える時期
 - 場合によっては第一子の育児との並行
 - 家事・育児に手がかかる時期
- ↓
- どのように家庭内の労働 (= 家事・育児) の分担が行われているのかを検討

妻がうながして達成される夫の家事・育児参加?

- 夫の家事・育児参加をうながすような妻の活動がある
 - ✓ 夫への不満が抑制されるありようも
 - 夫の家事分担の指示
 - 夫の家事の選好の考慮
 - 夫が子どもと関わりやすくする配慮
 - 夫に対する、得共を見越した働きかけ
- もっとも、不満 (願い?) も語られる
- 妻のマネージメントで夫の家事・育児参加がうながされることによって、妊娠期・育児期において、夫に変化がみられることも



最後に・・・
本日のパネルディスカッションで
いただいたお題

話題②：どのような(複雑な)問題の理解や解決に取り組んでいるのか

それをどのような哲学的視座(社会構成主義、ポスト実証主義、
解釈主義など)から探求しているか

【目的】

誕生から始まる発達と支援を生涯にわたってシームレスにつなぐ。全ての人が希望のもてる社会を構築するための学術的知見を創出する。

【研究内容】

少子高齢化時代におけるそれぞれの世代(乳幼児・児童・青年・社中年・老年)が抱える課題について、行動発達学、神経科学、ナラティブ心理学、地域社会学等の立場から学際的な研究を行い、また日本国外からの人口流入に伴うコミュニティダイバーシティの維持のための研究を行うことにより、科学的根拠に基づいた対人援助(教育や障害者就労支援・老年期の健康作りなどを含む広い概念)の再編成の実現に不可欠な新学術領域を創生する。